

## オーナーblog 第21話 「五感+時空予測⇒第六感」 (2024.9.9)

“勘”とは、「理屈で説明のつかない、ものごとの本質をつかむ心の働き」を指す。

訪問診療で、年に数回しか言葉を発しない93歳の寝たきり高齢女性が質問に返答した。末期がんで心を閉ざしていた中年男性が、病後の葛藤を1つ1つ表現し出した。手術の失敗？で寝たきりの高齢男性がリハビリを再開、薄暗かった部屋のカーテンが開いた。高度脳機能障害で褥瘡を繰り返す高齢女性が、治癒後再発もせず反射が増強してきた。これらは、五感を使って改善の未来予測をしてきた数か月の外向きの変化である。

五感とは視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚であり、時空予測は学習後の高次脳機能である。現代人は、視覚と聴覚に頼るコミュニケーション術に偏っている。

私の患者には失明の方が3名いる。会話では、視覚に頼る表現はなく、盲人同士のコミュニケーションのモードに変えている。診察終了時、「これで1か月後まで頑張れます！」と笑顔になられる。ベテラン看護師が、診察室から出てきた表情が元気になっていると指摘する。スタッフに反応しない寝たきり患者の場合、敬意を保ちつつ、視線を合わせて目の奥をのぞき込み、足裏をこそばして冗談を話しかける。刺激への反応や反射、発汗や温度変化を観察しながら時空を明るく開放的にしていく。正確には、そのようなベクトルに導くエネルギーを付与して相互交換を図る。その結果、良い変化を引き出せるときがある。

誰でもできる技術だが、その習得に数十年も時間を使う医師には出会ったことがない。快方に向かうために、薬を選択して臓器に調整を与えられるのは医師の特権である。